「共に喜び、共に泣く」

（ローマ12：9～21）

2019.9.22

８月のＳキャンプのとき、初日の夕食が始まろうとしていたとき、教団から一件のメールが届きました。九州の大分県にある佐伯福音教会の牧師である井上先生ご夫妻のお嬢さんが突然亡くなられた、ということを知らせるメールでありました。全国のニュースでも流れたそうですが、市内の国道から7メートル下にある脇の道路に転落して、そこで亡くなっているところを通りがかった人が見つけたということでした。その脇の道路というのは、あまり人が通らないような場所で、どうしてそこに倒れていたのか、誰も分からない。発見されたとき、身元を特定できる物は何も持っていなくて、近くに落ちていた車の鍵を頼りに、警察が時間をかけてどの車なのか、鍵のスイッチを入れたら反応する、それだけを頼りに一軒一軒、車のあるところを探し歩いたそうです。そしてあるアパートの前で反応する車があった。夜中に、井上先生のところに警察から連絡があったそうです。警察で遺体と対面し、お嬢さんであると分かった警察は、何らかの事件に巻き込まれた可能性もあるということで、「事件と事故の両面から慎重に捜査している」というニュースでありました。実は、井上先生のところは、３年程前に、まだ中学生でしたお孫さんが突然召されています。今度は42歳のお嬢さんが突然召されたということで、どうしてこんなことが起こってしまったのだろう、と誰もが思ったことでありました。

私たちの教団では、牧師本人が召されたときは、教団を代表して、教団委員の誰かがお花料を持って葬儀に参列するのが慣例となっています。けれども、牧師の家族の場合は、弔電を打ち、規定のお花料を後日届けるという程度でありました。今回の場合は、普通の死ではなく、あまりにも悲しい突然の死であるゆえに、教団から誰かが行ったほうがいいのではないか、特に地方の教会の牧師は、教団との心理的な距離というものを普段感じているので、こういうときこそ、教団から駆けつけるということが大切だと思うと、私が教団委員の皆さんに申し上げ、「よろしければ私が参ります」と手を挙げて、教団を代表して葬儀に参列させていただくこととなりました。私の両親が、同じ九州教区で井上先生ご夫妻と一緒だったということもあり、ぜひ行って差し上げたい、と思ったことでした。キャンプの翌日の火曜日は、もともと教団本部に行く予定でありましたので、教団本部での奉仕を済ませて、その夜、羽田から大分空港へ飛び、電車で佐伯へまいりました。７日の水曜日の夕方に前夜式が行われるということで、２泊３日かけて葬儀に参列いたしました。小学校の教員をしておられたお嬢さんで、子どもや保護者の方々、同僚の方々など、300名を超えるホールに入りきれないほどの方々が駆けつけた、という大きな葬儀でありました。

行く途中、先生ご夫妻に何と声をかけたらいいのだろうか？と言葉が見つからずにおりました。「こういうときに、どういう言葉をか

けられるだろうか？」。その道中、私がずっと心の中で繰り返し思い巡らしていたのが、今日の15節の聖句です。「**喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい**」。この聖句を思い巡らしているうちに、最初は「何と声をかけたらいいのだろうか」と考えていたものの、「いや、気の利いた言葉などいらない。悲しみに打ちひしがれている先生ご夫妻のもとへ行き、その悲しみに寄り添う、それだけでいい」と思うようになりました。

今朝は、この15節の一句に集中して、神の声に耳を傾けたいと思います。神が私たちキリスト者に求めておられることの一つが、「**喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい**」ということです。この「ともに」という勧めは、何も聖書でなくても、一般的にも言われていることであります。8年前の大震災の後、被災した方々の心に寄り添うことの大切さが教えられ、その基本姿勢として、「受容」と「共感」という姿勢が大切であると教えられたことでした。ただ、聖書にこのことが書かれているということの意味は、これを一般倫理としてではなく、神の言葉として、福音の言葉としてこれが語られている、ということであります。すなわち、ここはキリストの恵みの福音によって生かされているあなたがたは、このように生きることができる者とされている、という言葉です。

使徒パウロは、ローマ教会の人々に、まず「喜ぶ人と共に喜びなさい」と勧めます。一つの家庭の中で、家族の中の誰かに喜ばしいことがあったら、一緒になって喜ぶというのはごく自然のことでしょう。子どもが高校や大学の受験に合格した、と分かったら、本人だけでなく、家族は一緒になって大喜びをいたします。大きな病気にかかっていた家族が快復し、退院して家に戻ってきたとなりましたら、やはり一緒になって喜びを共にする。パウロはローマ教会の人々に、あなた方は神の家族として、「喜ぶ人と共に喜びなさい」と勧めます。

それならば、私たちは何か喜ばしいことがあったとき、教会の仲間に、「私と一緒に喜んでください」と素直に言えるかといいますと、必ずしもそうではない。そういうとき、自分たちばかり喜んではいけない、という心理が働くのではないでしょうか。たとえば、受験では、「まだ合格していないお子さんがいる」と思って遠慮したり、病気の快復の喜びにおいても、「なかなか思うように快復しない方がおられる」と思って、やはり喜びを抑えるということがある。なぜ、そういう心理が働くかといいますと、私たち自身の中に、喜ぶ人と共に喜べない心があることをよく知っているからではないでしょうか。悲しいことに、他の人の喜びに対して、素直に喜べない心、ときにはねたましく思ってしまう心が私たちの中にあることを認めざるを得ない。「隣に蔵が建てば、うちでは腹が立つ」という言葉があったりいたします。隣人の幸せや喜びを素直に共に喜べない心を持ってしまうのが、私たち罪ある人間であります。

そういうことからいえば、後半の「**泣く者と共に泣きなさい**」という勧めのほうがまだ受け入れやすい、まだ易しいと思うのではない

でしょうか。他の人が泣いて苦しんでいる、悲しんでいるのを見て、ねたましく思ったり、腹が立ったりすることはないからであります。反対に、泣いている人のところへ行って一緒に泣いてあげることによって、同情を示すことができる、クリスチャンとして、いいことをしてあげられる、と思うからです。

しかし、そのような同情は、うわべだけの、見せかけの同情になってしまうことがある。本当の意味で、悲しんで泣いている人のそばに寄り添うことができず、自分は悲しくないのにその人のために悲しんであげる、という自分のどこか優越感を満足させるだけのものになってしまうことがある。慰めようと声をかけている人が、「この人を私が慰めてあげる」と思うことがありますよね。そういうとき、「私が」というところに自分の関心が向いてしまう。**「愛には偽りがあってはならない」**（12：9）と読みましたが、そういうときにさえ、相手が中心ではなく自分が中心、自分に関心があったりする。そういうのが私たちであります。皆さんももしかしたら、深い悲しみを経験したときに、他の人から慰めの言葉をかけてもらいながらも、自分の悲しみに届かない、寄り添ってもらっているとはとても感じられない、そういう経験したことがおありかもしれません。言葉をかけている本人は全く気づかないもので、相手を慰めてあげていると思っている。けれども受ける側は、いろいろと言葉をかけてもらっていながら、かえって孤独を感じてしまうことがある。「ああ、この気持ちは、本当の意味では誰も分かってくれないのだなあ」と思ってしまう。

そのように、相手を励まそうとしているにもかかわらず、相手の心に寄り添う、共感することに失敗する一つの原因に、ある人は「悪意なき上から目線」と表現いたしました。これは、8年前のあの大震災のとき、私が強く感じ取ったことでありました。深く傷つき、痛み苦しんで倒れている人と同じ目線に降りるのではなく、自分たちは大丈夫な元気な人たちが、自分でも気づかないうちに、心理的に相手よりも上に立ってしまう。一緒になって痛み、一緒になって泣くというよりも、本人も気づかないうちに、その相手のかける言葉が、「こうしたらいい」というような、上から下へと何か指示するような言葉になったりする。もし、そのように少しでも上から何か圧力をかけられた言葉のように感じられたとしたら、それは相手の心に共感する言葉とはなりえず、慰めの言葉とはなりえない。

それゆえ、**「泣く者と共に泣きなさい」**という勧めは、私たちが思うほど簡単ではないことです。この言葉に示されている一つの姿勢は、相手が悲しくて、辛くて泣くのを、そのまま受け入れてあげる態度、すなわち〝受容〟の態度です。**「共に泣く」**というのは、大前提として、その人が泣くのをそのまま受け止めることです。「いつまでも泣いていてはダメだ」と、相手が泣くのを止めようとするのではなく、「今は泣いていいんだよ、今は悲しんでいいんだよ」と、その悲しむ気持ち、痛む心をそのまま受け止めようとすること―それがいわゆる〝受容〟と呼ばれる態度でありましょう。

受容することの大切さが繰り返し語られるのは、それが実際には行われないことがある

からであります。慰めようとしている本人は、相手の気持ちを受け止めているつもりでも、相手は「自分の気持ちを受け止めてもらった」とは感じないことがある。むしろ、「ああ、こちらの気持ちはちっとも分からないんだ」と、かえって相手との距離を大きく感じ、孤独が深くなってしまうことがある。そして、これが信仰の世界になりますと、もっと強くそれが出てしまうことがある。信仰的と思える声がけが、かえって相手を苦しめることがある。たとえば、「神さまが一緒だから大丈夫！」「神さまに全てをお委ねしましょう」などの勧めの言葉は、今嘆き悲しんでいる人の態度を何とか変えようとする言葉として響く。すなわち、「信仰者はこうあるべきだ」と、どこか圧力がかけられているような、そのように受け取るものです。それはすなわち、「神さまがいるのだから、いつまでも悲しんでいてはいけない、泣いていてはいけない」という意味を持つメッセージになってしまうことさえある。かける人は「そんなつもりはない」と言うのです。でも、その言葉が持つ意味、相手がどう思うかと考えるときに、その言葉の持つ意味が違うということに初めて気づく。信仰者であるなら当然、悲しんでいる本人も「いつまでもずっと悲しんだままでいい」などとは思っていないハズであります。けれども今は、ただ嘆き、悲しみ、泣くことしかできない。それが偽らざる、今のありのままの自分の姿であります。それを「それではダメだ」と言われようものなら、どうすることもできなくなってしまう。

ですから、大切なことは、今の相手の姿をそのままで受け取ることでありましょう。「今は泣いていいんですよ」「悲しんでいいんですよ」。もしかしたら、その人よりももっと大変な状況にありながら、涙など見せずに頑張っている人がいるかもしれない。それを見て、「あっちにはもっと大変な人もいるのよ」などと言ったとするならば、それは相手の悲しみを受容していない態度でありましょう。すなわち、「その程度のことでそんなに悲しむな！」というメッセージでさえあります。その人、その人、状況が違い、回復に向かうペースも違います。その相手のペースを大事にして差し上げる。人は、その傷口に適切な手当がなされるならば、やがて必ず健やかさを回復していくものであります。時が来れば必ず回復すると信じて、今は傷つき、倒れ、悲しんでいる、その姿を「今はそれでいいんだよ」と、オーバーであったとしてもそれを認めて、受け入れて差し上げる。

そのように、相手の心をそのままで受け止めた上で、その相手の心に寄り添う。それが、**「泣く者と共に泣く」**という姿勢です。それは一般的に「共感」と呼ばれる姿勢であり、相手の痛みや悲しみを自らの痛み、自らの悲しみとする。それは、ボランティア精神を発揮して、「共に泣いてあげる」というのではありません。相手がどんなに悲しいだろう、どんなに苦しいだろうと想像するとき、こちらの心が同じように痛み、同じように苦しむ。

ただ、私はこの頃、つくづくと思いますのは、相手の深い悲しみが本当には自分に分かるはずがない、と思います。よく、何か大きな

悲しみや苦しみにあった人に対して、相手を慰めるつもりで、「あなたの気持ち分かるわ」と言う人がいます。なぜそう言うかといいますと、自分も似たような経験をしているからであります。その自分の経験から、相手も今同じように感じているだろうと決めつけて、「あなたの気持ち、分かるわ」と言う。2年前、私の父が浴槽の中に沈んで死んでいるのを翌日になって発見するという、家族にとっては思いもかけない辛い死に接したことでした一ただこれは一般的にはよくある話であります。そのために、翌年の年会で先生方から声をかけられたとき、「私の親も、以前同じように…」という話を聞かされたことでした一「だから分かる」と言うわけであります。そういう人は、相手を慰めるつもりで声をかけたものの、途中で自分の話を始めてしまう。こういう人、実にたくさんいます一相手から話を奪って、自分の経験の話を始める。慰めているのではないのです。自分の話をしている。私たちはどこまでも自分が中心になる。自分に関心がある。自分のことを話したくなる。そして相手に押しつける。およそ、慰める態度ではありません。そのときすでに、悲しむ相手の心に寄り添うことをやめてしまっている。

一人の人の悲しみは、決して他の人の経験と同じではない、それぞれの固有な経験であります。それを一般化しては決していけない。まるで多くある事例の一つに過ぎないかのように一般化されることは、悲しむ本人にとってはとても辛いことです。「そのぐらい大したことではない」と言われているかのように思う。よくあることだと言われる。ですから、それくらい我慢しなさいと、言っている本人はそういう気はないのに、受け取る側はそう思う。私は本当にそう思うことは、人の悲しみなど、本当の意味で他人に分かるはずがない。しかし、分からないことを分かろうとする、その姿勢こそ大事なのではないでしょうか。分からないからこそ分かろうとするときに、相手のうめき、心の声に聞こうとする。今は平気でいるように見えながら、本当は心の中で、思いを隠して表情を隠しているけれども、どんなに深く悲しんでいるだろう、痛んでいるだろう。こちらが語ることをやめて、ひたすら相手に寄り添う、それが**「泣く者と共に泣く」**という姿勢です。本当に深く痛み、悲しんでいる人にとって、気の利いた言葉などかけてもらわなくてもいい。かえって邪魔になる。必要なのは、自分の心の痛みが分かろうとしてくれる人であり、やはり一緒に泣いてくれる人でありましょう。

木曜祈祷会で、3週間ほど前でしょうか、裕子牧師が、ある本（『こころの深呼吸』）の中にあった文章で、「雄弁な沈黙」というタイトルの一文を紹介していました。

悲しみにくれる友だちに、かける言葉もなく、寄り添い続ける人の沈黙。
その沈黙には、どんな慰めや励ましの言葉よりも誠実な、
愛のメッセージが込められています。
そんなときには、沈黙こそが最も雄弁な言葉なのです。

本当にそうだなと思います。相手の悲しみに本当に寄り添おうとしたならば、その相手の悲しみなど自分には十分には分からないこと

を痛感する。そうしますと、もはや言葉がなくなり、かける言葉を失い、ただ沈黙するしかない。

最初にお話ししました井上先生のお嬢さんのご葬儀のとき、ご遺族はどんなに辛い思いをしているだろうか?その思いを抑えながら遺族席に座っておられるのだろうか?と思いながら、葬儀に出ておりました。というのは、葬儀の中で、キリスト者が語る言葉の中に、私からすると、あまりにも信仰的過ぎる言葉が私にはひっかかりました。私はあまり信仰的な人間ではありませんから、あまりにも立派な、ストレートな信仰的な言葉が心に刺さって、私は耳を塞ぎたくなる思いさえいたしました。たとえば、「私たちクリスチャンにとって、死は天国への凱旋です」と言われたりした。たくさんの未信者の方々を前に、キリスト教信仰を証ししようとして語られたのでありましょう。間違ってはいない、確かに、聖書の信仰としてはそれが正解かもしれない。しかし、このような悲しい死を前にして、その信仰の言葉がご遺族の悲しみに寄り添うものになるだろうか?と、何か心が痛くなるような思いで聞いておりました。葬儀の最後、遺族代表の挨拶として、牧師であり、父親である井上先生が挨拶されました。その中で、涙を必死に堪えながら、こう言われたことが心に残りました一「なぜ?という、永遠に解くことのできない疑問にぶつかった」。それを聞いて、「そうだよね、ご遺族としては、『なぜ?』だよね」と思ったことでした。その葬儀が始まるまでの待っている間、ご遺族の慰めを祈りながら、もし自分がこういう状況の司式をするとしたらどう祈るだろうかと思いながら、葬儀を待っておりました。普段使う式文など、こういうときには通用しない。どう祈るだろうか?私は、このような祈り、という思いで心でにれはんでいました。

「天の父なる神さま。私たちは今、先日突然あなたのみもとに召された井上香織姉を葬るために、ここに集まって参りました。あまりにも突然の悲しい知らせに、誰もが呆然としながら、言葉に出来ない深い悲しみと、怒りを覚えながら、私たちはここにおります。私たちの誰もが、あなたの胸ぐらをつかんで、『あなたはなぜ、香織姉を召してしまわれたのですか。なぜこのような悲しい死をあなたは許されたのですか』と、そう訴えずにはおれない思いを抱えています。どこにもぶつけることのできないこの悲しみと怒りを、あなたはそのままで受け止めくださると信じて、あなたを見上げます。そのあなたは、私たちのために御子イエスを死に渡されたお方です。私たちの罪のために、御子が十字架で死ぬことを許されたお方です。その父なる神による天来の慰めを、ご遺族の方々にお与えください。在りし日の香織姉を偲びつつ、私たちが心を込めて葬ることができるように、この式を守り導いてください。慰め主なるイエス・キリストのお名前によって祈ります」。

この「**喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい**」という聖句を思い巡らすとき、私たちが思い起こすことは、私たちにとって誰よりも、主イエスこそ、共に喜び、共に泣いてくだ

さるお方として、私たちと共におられる、ということであります。あのルカ15章のたとえ話では、迷子の羊が見つかったというときに、**「わたしと一緒に喜んでください。いなくなった羊を見つけましたから」**（ルカ15：6）と語られた。「共に喜ぶ」ことを求められた主イエスです。家族を失って悲しんでいる者たちに、主イエスは**「涙を流された」**（ヨハネ11：35）とあります。あの十字架にかけられたときには、一緒に十字架につけられた強盗が、**「イエスよ、あなたが御国の権威をもっておいでになる時には、わたしを思い出してください」**（ルカ23：42）と願い出た。すると主イエスは、**「よく言っておくが、あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう」**（43）と言われた。主イエスの十字架は、「私はどこまでもあなたがたと共にいる」というメッセージであります。喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣く、そういうお方が私たちに与えられている。私たちが苦しみや悲しみに打ちひしがれ、孤独に悩むときも、十字架の死に至るまで、私たちと共にどん底へと降られた主イエスが、私たちと共におられる。

今日の三つの賛美、共通する言葉は「友なる主イエス」です。「慈しみ深き友なるイエスは、我らの弱きを知りて憐れむ」、こういうお方が私たちと共におられ、共に喜び、共に泣いてくださる。だからこそ、私たちは「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣く」ことができる。パウロがこの章の初めに、**「兄弟たちよ。そういうわけで」**と語り始めたように、兄弟たちよ、私たちには、決して私たちを見捨てることのない友なるイエスがおられる。どこまでも私たちに寄り添ってくださるお方が与えられている。そういうわけだから、そのキリストによる慰めを受けた私たちは、喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣こうではないか、と勧められています。私たち一人ひとりは、小さなキリストになっていく。喜ぶ人のところに行き共に喜び、泣く人のところに行き共に泣く。小さなキリストとして私たちは一人ひとりのところへと遣わされています。十字架の死に至るまで、私たちと共にいてくださるお方が、今朝も与えられている。その主の恵みをかみしめながら、私たちを必要とする方々のもとへと今朝も遣わされてまいりたいと思います。

お祈りをいたします。

「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい」。

天の父なる神さま、あなたの御名を讃えます。私たちが人の悲しみに寄り添うことができずに、そこでも自分に関心があり、自分が中心になってしまう偽りの愛に生きてしまいやすい私たちですけれども、イエス・キリストによって救われて、こんな私たちに離れることなくどこまでも共にいてくださるキリストが与えられていることを信じる私たちが、初めて共に喜び共に泣く、その歩みをスタートすることができます。今朝も、友となってくださった主イエスの恵みを覚えながら、今日から始まります一週間の歩みの中で、私たちの周りに生きる方々のところへ、小さなキリストのようにして遣わされてまいりますように、私たちを支えてください。

今、悲しみの中にある方がおられます。家族

を失ってうちひしがれている仲間がいます。どうぞ、人間の慰めは限界がありますが、主イエスさま、あなたの支えをお与えください。

今日休んでいる方々、慰めを必要としている方々をあなたが顧み、また、この礼拝の場へとお返しくださいますようにお願いいたします。

東北教区五つの教会の上に、弘前、三沢、築館、仙台、福島、立てられている教会を祝福してください。

主イエス・キリストのお名前によってお祈りいたします。アーメン。

（仙台南光沢教会牧師　佐藤信人）